

子どもは「育てられて育つ」: 関係発達論再考のために

鯨岡峻
(中京大学)

1. はじめに

皆さん、こんにちは。今、松本さんから企画趣旨を述べてもらって、本当は「そういうことだったのか」と(笑)、どうも企画趣旨を十分理解していなくて、そういう趣旨ならば、有機体論的・全体論的アプローチとかですね、そういう昔わたしがいろいろ言ったり書いたりしたものをお話をしても良かったんですけども。とにかく、「鯨岡理論の現在」なんていうテーマでこういう集まりを持たれるということ自体、やっぱり何か違和感がありますよね(笑)。まだ現役のつもりの人間としては、「死んでからやってもらう話じゃないか」というような思いもあったりして、ちょっと違和感があって、どの面下げてこういう集まりに出てくればいいのか、自分でもちょっと見当がつかないで、ちょっと戸惑っているところがありますね。わたしの理論、あるいは過去から現在にいたるわたしの軌跡。そういう辺りを語ってほしいというのが、たぶん松本さんの趣旨だったと思うんですけども、わたしが歩んできた道程については、『ひとがひとをわかるということ』(ミネルヴァ書房,2006)の中にあらまし書いておきましたので、それで代わりにしていただいて、後のディスカッションの中で、「昔、これをどういうふうと考えとったんだ?」というふうに質問してもらえれば、「わたしは当時こういうことを考えていました」という形でお話させていただこうかなというふうに思っています。

2. 「育てる」営みへの回帰

そこで今日は、「鯨岡理論の現在」についての学問的な話は、後で登壇してくださる方々にしていただいてですね、わたしは今現在、自分が考えていることを少し、1時間ばかりお話をさせていただいて、自分の役目を果たそうと思っています。で、わたしは関係発達論という立場を主張してきたんですけども、人が人を育てるということはどういうことなの

か、というごく当たり前のテーマに、もういっぺん立ち返って考えてみたいというのが、定年になる前後から考え始めていたことです。京都大学時代というのは、どうしても院生諸君もいましたし、自分の学問的な立場をどうやって整合的に語るかという、そっちのほうに関心があって。そのためでしょうか、子どもが育てられて育つ現場にもうちょっと立ち返って、そこをもういっぺんしっかり考え直して、問題を抉りだしてというところの姿勢が少し弱くなっていたなあ、と少し反省するわけですね。で、たまたまでありますけれども、2年前の今ごろ、全国私立保育連盟のほうから委嘱があって、当時、保育所保育指針の改訂が進んでいたんですけれども、それにかかわって全私保連として何か提言をしたい、つまり「指針をこういうふうに変えてほしい」ということの要望書を出したい、ついでは、まあ「書いてくれ」という話がありました。「自分たちでやれよ」とか思っていたんですけど、何としても「書け」というので……。ちょうどそのころ、わたしも今の保育の現状については大変危機感を持っていたので、それじゃあ「引き受けようか」というふうに、案外軽い気持ちで引き受けてしまいました。「なに、言いたいことを書けばいいんだ」ということで、言いたいことを書いたわけですけども。そのエッセンスがレジュメに載っている3行なんです（当日配布したレジュメは、29ページ以降に掲載）。

「保育の場は、子どもたち一人ひとりが周囲から主体として受け止められ、主体として育っていく場である。そして保育は、それぞれが主体である保育者と保護者が共同して子どもを育てるという基本姿勢の下に営まれるものである」

10 ページほどの提言を圧縮すればこの3行になるという中身なんですけども。わたしはこの3行の文言が、今、特に保育を意識しながら、あるいは家庭の養育ということを意識しながら「育てるという営み」を考えたときに、「その3行に凝縮されるだろう」、「ここに本質があるだろう」というふうに思っているわけですね。

ひとつは、保育者に子どもの主体としての思いをまず受け止めてほしい。「ああ、誰それちゃんはこうしたかったんか、こうしなくなかったんか」というところを、まず受け止めてほしい。しかし受け止めるだけでは保育として成り立たないから、「でも、ここはもうちょっとこうしてほしいな」というふうに先生の気持ちを伝えたり、あるいは「これは、先生やめてほしいよ」というふうに先生の気持ちを伝えていく。それが保育です。子どもの思いを受け止めて、そして自分の思いを返していくのが保育です。しかし現実の保育は全然それとは違って、「こうしなさい、ああしなさい」と、大人の思いでグイグイ引っ張っていくような保育になっている。このことが、結局は子どもを一個の主体として育てるのに失敗することに繋がっている。これは子どもが大きくなってからもそうだし、あるいは子

どもが障害のある場合でもそうだし。とにかく大人の願っていることにはめていくことが、子どもを育てることであるかのような考えが、日本の文化の中に染み通ってしまって。そのことがいろんなところにネガティブな顔を出している。そのことを強く思って、「これは何とかしなくちゃいけない」と思ったものですから、この保育の世界に首を突っ込むようになってしまったんですね。

その「提言」を書いたあたりから、とにかくわたしは土日が無い生活になってしまったんですね。定年になってゆっくりして、山登りもあちこち行こうなんて思っていたのに、全然それどころの話じゃなくて。とにかく土日のない生活になってしまった。京都大学時代よりも忙しくなってしまった。たぶん中京大の学生さんにはずいぶん迷惑を掛けるような状態になっているなあと思っているんですけどね。一つは、保育関係の人たちを前にした講演が物凄く増えた。それからもうひとつ、私が京都市営保育所の保育に首を突っ込んで、保育の現場を見て回る機会が増えた。要するに、その保育の拙さ加減をこの目で見て、それをどうすれば変えていけるかということに直接かかわるようになった。

そういう意味では、非常に実践の側に軸足を移す格好になってですね、あまりその発達理論がどうのこうの、エピソード記述の理論をもうちょっと理論的に **refine** してとか、そういう問題関心はずいぶん遠のきました。いかに現場と切り結ぶか。そして、「育てられて育つ」というテーマをいかにもういっぺん見つめ直すか。そういう意味で生の実相といいましかね、生きている現実、子どもの現実、そこに立ち返って、それと格闘するというのがそもそも松本さんがさっきスライドに出していただいた有機体論的・全体論的視点ということの意味だと思うんですけども。そういう意味では、昔の初心に返ったというべきかも分かりません。これまで少し理論の側に軸足を移してですね、よい学生たちを育てるということに汲々としていましたので、そうならざるを得なかったんですけども。もう少し現場というものに立ち返って、人が生きている現実をもうちょっとしっかりとすくい取ってみよう。そういう動きに今、少し変わってきていますね。で、そこが今のわたしの大きい関心であります。そして現場に行って、午前中に3時間、子どもたちが保育されているところに行って子どもたちと接して、そして午後に保育士さんたちといろいろディスカッションしてみますと、やっぱり今の日本の置かれている、子育ての状況、保育の状況、これはかなり深刻なものなんですね。そして「これは何とかしなくてはいけない」という、この歳になって、もうじき棺桶が近くなった今になってですね、「何とかしなくちゃ」という、本当に焦るぐらいの気分でおります。ですから、鹿児島から北海道まで、全国津々浦々飛び回って、何とかこの危機感を理解してもらおうと思って奮闘しているわけです。わたしの大学時代の友人は「鯨さん、それってまるであなたはエヴァンゲリストだ」と、つまり「愛の伝道師か」って言うわけですね（笑）。で、これにはいい加減笑ってしまいました

けれども。いやしかし、冗談ではなくて、そういうある種の使命感みたいなものがこの歳になって湧き起こってきているなあと思います。だから少々しんどくても、拒まずに動くと思っているところなんですけどね。

3. 学問の土俵での議論と現場の生の実相との乖離

で、レジュメの3のところです。学問の土俵での議論と現場の生の実相との乖離ということですけども。こうして現場に首を突っ込んでみますと、やはり学問の世界で議論してきたことが、やっぱり浅いなあと思います。以前からわたしは生の実相に迫るということ、それが現象学の精神でもあるわけですが、関係発達論の屋台骨は、人が生きるその現実を、いかに生き生きとありありと捉まえてくるかというところにある、と考えてきました。だから、一般的な言説を導くことが目的なのではなくて、いかに人が生きているその現場に臨み、そこで生の実相をすくい取って、「人はこうやって一生懸命生きている」ということを、いかに周りの人たちに伝えていくか。それが関係発達論のエッセンスだということを院生諸君にもずっと語ってきました。

で、それにしてもですね、研究の立場の人たちの書くもの、例えばそれがエピソードという形で取り上げられているものでもですね、それが何かこう、底が浅い。言ったら悪いけれども、大変……空疎に響く。実際に子どもが生きている現実について、例えば保育なら保育の領域で書いた研究者のものを読んでみると、まだまだそこに大きな距離があって、「薄いなあ」という感じが否定できないんですよ。エピソード記述というのはまさに、生の実相に迫ることを目的としているんだけど、例えば赤ちゃんとお母さんのかかわる場面をエピソードに書いたものを読み返してみても、確かにこれは今、目の前の二人の関係をありありと捉えたものではあるけれども、しかしそのバックがない。今、目の前の子どもとお母さんが、ここでこうかかわっているところをエピソードで描くことは成功しているかもしれないけれども、この人たちの生活そのものを取り上げていないなあ、という思いは強くするんですね。だからこの間、現場に出てみてわたしすごくショックだったんですね。まず、京都市の保育所にいったときに、「この子が気になるので、この子をマークして見てくれ」と言われたんですね。まあ、最初は遠くからその子を見えています。で、非常に複雑な家庭事情なんだと言われている子どもを見ていました。見ていて、子どもは結構元気に遊んでいる。「あれ？」とか思いながら、「いや、元気に遊んでるやない」とか思って傍に寄って行って、その遊んでいる傍らにしゃがむと、その子は「あんた誰？」って訊くんですね。年長の子なんだけど、「あんた誰？」ってね。大抵わたしは「誰のおじいちゃん？」と聞かれるんですけどね、この歳になるとね（笑）。「誰のおじいちゃん？」と訊かれたときに、いつも常套句として返す言葉が、「誰のおじいちゃんかなあ？ あなたの

おじいちゃんにしてくれる？」と言うと、一瞬ギョッとしてね、「嫌や！」とかってね(笑)、たいてい拒まれるんですけど。そんなふうになると、だいたいその子どもとコミュニケーション取れるんですけどね。「ああ、これはなかなかいいせりふやなあ」と思ってね、いつもそのパターンで臨んでいるんですけども。「きょうもそういうふうにいけるかなあ」とか思っていましたらね、「あんた誰？」って言う。そこで「さあ、誰やろ」言うのと、その子は「警察やろ？」って言うんですよ。「えっ？」と思って後で聞いたら、2日前にその子のお母さんは、覚せい剤所持でその子の目の前で連行されているんですね、警察に。で、そういう子どもが京都の保育の現場にはたくさんいる。けれども、その子が完璧に荒れているかというのと、荒れている面と、すごく一生懸命に健気に生きてる面とあるわけですよ。そのとき「ああ、子どもってすごいなあ」と思いましたね。本当に家庭でボコボコにされて、だから園でも乱暴な子どももいっぱいいますが、しかし、家庭が相当ひどいののに、本当に子どもらしい表情もときおり見えてね、「ああ、この子はこの子なりに一生懸命生きているんだなあ」と思えるところもあるんです。

そういう子どもの現実には接していると、自分がこれまで取り上げてきたのは、ほんわかと幸せな家庭の、ごくごく恵まれた母と子のかかわりの場面だったのだ、ということをつくづく思わされてね。やはり「子どもは育てられて育つ」ということの問題をもっと広く、もっと深く取り上げ直す必要があるなあというのが、今の率直な気持ちですね。それに対して、「じゃあ、発達研究というのは一体何なんだ」というと、何なんでしょうね……だから今わたしは、この「発達」という考え方がいかにわたしたちの日常生活の中に入り込んできて、親の素朴な子育てをいかに壊してきたか、ということをおぼろけにはいられません。「これができるように」、「あれができるように」、そして、そのことができることがいっぱい増えればその先にその子の幸せが待っているかのような、そういう発達観がなぜか、この100年の発達心理学の歴史の中で、いつのまにか世の中の人たちの考えの中に染み込んでしまった。で、そのことが子どもを不幸にしているなあと思う。発達という考えを抜きに子どもを育てられないのだろうか？」と思います。そういうことも含めて、もういっぺん、その「育てる」ということの問題に入り込んでいきたいなあ。

レジュメの3から4にかけてのところに、もうひとつ踏みこみたいんですけどね。関係発達論の立場というのは、従来の客観・主観図式を乗り越えるという意味でのパラダイム転換を意図したものだということを、先ほど松本さんから紹介された『心理の現象学』を出版した25年ほど前から、語ってきたんだけど、従来の主観・客観図式を乗り越えるという意味でのパラダイムの転換というのはもう古いんじゃないかと。まだまだこの意味でのパラダイム転換にこだわって議論しなくてはいけないことは学問の世界には山ほど残っているんだけど、実際に子どもたちが生きている現実を踏まえて言えば、主観・客

観図式を乗り越えたからパラダイム転換がなされたと言っているようなのは、まだアカデミックすぎる議論だな〜と。やっぱり対象化してとらえることに止まっているなあと、これは学問の、ある意味宿命なんですけどね。物事を対象化してとらえるということと、現実にそのことを生きるということとのあいだの乖離。これは『心理の現象学』を書いている頃からずっと思ってきたことです。「生きられる還元」なんていう、みょうちくりんな概念を作ったところから思ってきたことなんですけれども。確かに、対象化してとらえなければ学問にならない。しかしながら、今日の前のひとりの生きている人と自分が実際にかかわりを持って、その場を生きなければならないことがあるときに、そこを生きるという問題と対象化して捉えるという問題との間にある乖離をどう考えるのかというところに、まずは今、ある意味で学問全体がパラダイム転換を迫られることがあるんじゃないか。

例えばですね、家庭で離婚になって、その子どもの親権をどっちに認めるかというときに、家裁が審判を下しますよね。例えばその子どもと親とがかかわり合って遊んでいるような場面を調査官が観察して、そして所見を述べる。それにもとづいて裁判官は判定を下すわけですよね。それがいったいどういうふうに進むか。子どもが生きている現実をエピソードに描きだせばいいじゃないかと思われるところです。わたしがやっているようなエピソード記述の方法・手続きで、その子とお母さんが遊んでいる場面を調査官が観察して、そしてそれをエピソードとして書いて裁判官に渡す。すると裁判官は「これは作文か？」というわけです。そしてもっと「客観的に書け」と裁判官は言うわけですね。客観的にというのはどういうことなのか。いくらその調査官がわたしのエピソード記述を学んで、いい具合に母と子のかかわりの場面を描きだしても、裁判官はそれを読んで理解する土俵を持っていない。それは学問よりももっと手前の問題ですね。世の中全体が「対象化して捉えられないものは問題にできない」という、そういう枠組みを強く持っている。それをどうやって変えていけばいいんだと思いますね。心理学でもこの枠組みを変えるのが大変なんだけどね。それをもっと領域を越えて変えていくためにわたしたちはいったい何をしていいんだらう。どういうふうに事を運んでいったらいいんだらうと思うと、ちょっと気が遠くなります。わたしが生きている間にそこまでできるなんて夢にも思いませんが、しかし恐らくここに集まっている人たちにはぜひそういうことを考えていてほしい。世の中にそういう現実があって、子どもと親とのかかわりの中で観察すれば、「子どもはこっちの親に懐いてるなあ」と思われるようなことをいろいろ描きだしていても、「これは客観的ではない」、「何か客観的な手掛かりとなる資料を出せ」と。「そうでないとこっちに親権を移すことができない」ということになる。裁判所が持っているこの強い枠組みというものを、じゃあわたしたちはどうやって超えていったらいいんだらう……ちょっと気が遠くなるような感じがしますが、でもそういうことをちょっと考えています。先へ進み

ます。

4. 関係発達論の再考に向けて

レジュメの2枚目なんですが、関係発達論の再考に向けてというところです。「育てられて育つ」ということを、育てる営みにいったん回帰して、「子どもは育てられて育つ」というひとつのキーワードの下に、これまでいろんな本の中に書き散らかしてきたことをもういっぺん整理してみよう、そういう必要があるなと思っていた矢先に、この『教育と医学』という雑誌ですけれども、この雑誌の企画をしている九州大の先生から、「親と子の関係発達」というテーマで連載をしてほしいと言われたんですね。「親と子の関係発達」というテーマは嫌だから、それは副題にまわしてもらって、「子どもは育てられて育つ」という、今いちばんわたしの関心のあることを連載の主題にしてもらえるのなら、書いてみましょうということになりました。つまり、それを通してこれまで関係発達論で述べてきたことを、「子どもは育てられて育つ」という視野から、もういっぺん考え直して、ある意味で肉付けもし、足りないところも補い、反省するところは反省してやっていこうということを書いていましたので、ある意味ちょうど渡りに船みたいな形で、これをお引き受けすることになったわけです。

従来の「育てられる者から育てる者へ」、「看取る者から看取られる者へ」という、人の生涯発達過程に重心をおいた関係発達論というのは、振り返ってみれば、わたしがわたし自身の人生を一生懸命説明しようとして作ってきた理論だなあとということを、今さらながら思いますね。京都大学に移ってから書いた4、5冊の本は、ある意味全部自分の経験です。自分をいかに自分で理解するかというのがベースですね。自分が対人関係で悩んできたこと、自分が親子関係あるいは夫婦関係のなかで困ったり、悩んだり、あるいは喜んでしてきたこと、それをある意味学問にしようとしてきたのか、たったそれだけのことだったのか、とね（笑）。関係発達論なんて言うのと大きな考え方のようにだけでも、わたしがいかに周りの人と関係を持って、その生涯を生きてきたかということを理論構築してきたんじゃないかなあと思うところがあります。ちょうどわたしが退官のときに大阪でやったセミナーがありました。そのときに披露したことなんですが、わたしの大学時代の友人が『ひとがひとをわかるということ』を読んで感想を書いてきてくれたんですね、結構長々と。その手紙の中には、「そうか、関係発達論って、峻と和子の関係発達論ね」と書いてあるんです（笑）。もう頭にきてね（笑）。だけど、よく冷静になって考えてみると、「ほんま、そうやなあ」ってね。それを否定できないなという感じがあって、「そうや」と思ってしまっただけですね。

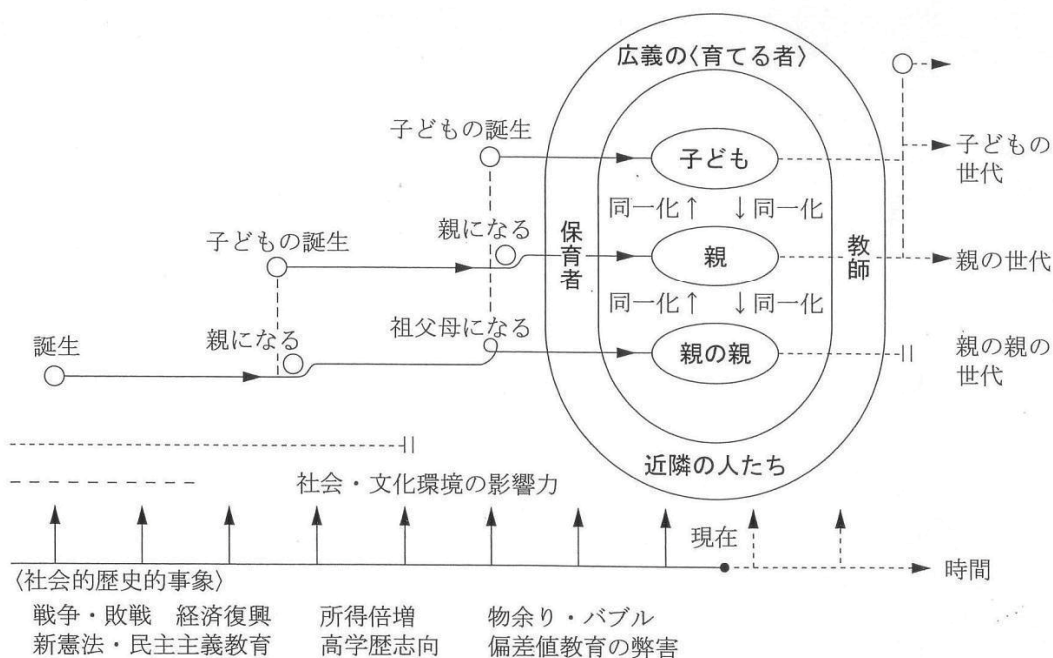
で、そこから「育てる営みへの回帰」という今の関心にもういっぺん立ち返って、わた

しの関係発達論をもういっぺん読み直してみる。そうするといろいろ手直ししなくちゃならないところが出てくる。今その手直しを含めながらこの連載を始めているわけです。7月号からスタートして今9月号まで3回出ています。原稿は5回まで書いてあるんですけどね。一応予定としては、2年やってくれと言われていまして、24回書かないといかんのです。そこまで生きておれるかどうか分からないですけども。まあ、その24回連載すれば、それを整理して本にすると出版社は考えているようです。そこで今どういうことを考えているか、ちょっとその一端をご紹介して今日のわたしの役目を果たそうと思いますけれども。

5. 関係発達論の概念図の修正とその解説

レジュメの2枚目のところで、「関係発達論の概念図の修正とその解説」という箇所があります（以下に、図1を転載）。図1は『教育と医学』に収録した図版です。前にいろんなところにこの元の図を掲載しましたので、ここにお集りのみなさんはたいていご存じだと思います。この図には二カ所変更点があります。

図1 関係発達論の概念図



1つは、祖父母の世代、つまり親の親の世代の線を、祖父母になるというところでもう一回転させたところ。それはわたし自身が去年の暮れにジージになったからですね。娘が出産前、ちょっとつわりがひどくて3、4ヵ月前ぐらいから里帰りし、そして出産後子

どもが3ヵ月になるまで我が家におりました。そのときに、ジージ、バーバになった二人は娘の子育て支援にかかわるわけですが、これが並大抵ではない。ひとりの娘が母になっていく道程を親の立場で見守ることがどれほどしんどいことか。物理的にもしんどい。わたしは二人とも娘で、家内も「わたしが母親になったときそれほどしんどい経験はなかった」と言うんですけどね。とにかく上の娘の最初の子は男の子で、お腹の中にいるときから暴れて大変だった。「この子、出てきたらよっぽどやぞ」とか思っていたんですけども、ほんまによう泣くし、なかなか寝ないし。新生児期の頃なんて、朝起きてみると娘は「きのうの晩、ぜんぜん寝てない」という感じで、ほとんど幽霊状態ですよ。だから、わたしが赤ちゃんを抱っこして1時間でも2時間でもとにかく娘を寝かさなければならぬ。で、何回カラスを歌ったでしょうね。もう毎日、わたしが名古屋から帰れば抱っこをする係で。しかし、これはジージの自慢なんです、わたしがカラスを歌うと寝てくれるんですよ。もう諦めて寝てしまうのかどうか分かりませんがね(笑)。それから沐浴から普通の入浴に変わるときに、ジージが最初に入れてやるんですけども、そのときでもすさまじい。もう風呂の中でどれほどおなかを蹴られるか。娘のときにはこんな経験は全然なかったなあと思いますね。赤ちゃんが夜泣くので、娘が抱っこすると腱鞘炎になる、でも母乳だから腱鞘炎の痛み止めを飲めない。仕方なくバーバが代わって抱っこすると、だんだん、今度そのバーバのほうにもガタがくる。本当に、「祖父母になる」というのは大変です。前はスッと一本線を書いてたんですけどね、「これ違うやないか」と。わたしの関係発達論だったものですから、自分はその祖父母になった経験がなかったので、スーッと一本線だったんだけど、とんでもない。これはやっぱりクルリと一回転させないと。勿論、初めて親になったときのコペルニクスの転回とは違うけれども、やはりここもクルリと一回転だなあと。これはやはり生の実感からして修正したいと思います。これはまあ、ちょっと冗談みたいな話ですけども。

で、「育てられて育つ」ということにもういっぺん視点を置き直して振り返ったときに、これでは拙いと思う箇所が出てきました。この関係発達論の概念図では楕円が二重になっていて、広義の「育てる者」、つまり保育者・教師・近隣の人たちというのが外側の楕円に書き込まれていますが、従来の図ではそこがなかったわけですね。これまでは、子ども、親、親の親というのを楕円で囲っただけの図になっていたんですけども、それを振り返ってみれば、やはり血のつながった三世代というような、非常に狭い親子の関係というところで関係発達論を考えていたなあと思います。しかし子どもという存在は、もっといろんな人に育てられて育っていく。保育者もいれば、先生もいれば、近隣の人もいれば、本来いろんな人に支えられ育てられて子どもは育っていくわけですね。その現実をこれまでの図はあまりにも抽象化しすぎていたと思います。親子の世代間の関係という部分に抽象

化しすぎてきたということが、まずひとつの大きな反省点としてある。だからこの命の世代間連鎖も、血縁のつながりみたいなものばかりが強調されるような感じになってしまつて、これはちょっと拙いなあと。

そこでまずレジュメの4のところまでは、これまで書いてきたことをほとんどなぞったものなので、きょうは時間ありませんので、これは省略しましょう。ただ少し言えば、これまでこの概念図をベースにして命が次々に世代間で連鎖されていくんですよ、と言ってきました。つまり、わたしは自分の親からこの命をもらってこの世に生まれてきた。で、私の親もまたその親から命をもらってこの世に生まれてきた。それを裏返せば、命が次々と次の世代へと連鎖していくのが分かります。これが関係発達のひとつの構図なんだということを言ってきました。それと同じ考え方からすると、死もまた世代から世代へと連鎖していくというふうに考えなければいけない。つまり、前の世代を看取った者が、次の世代に看取られて消えていくというね。命の誕生も世代から世代へと連鎖していくんだけど、命の終焉も世代から世代へと連鎖していく。従来の考え方を少し膨らますだけで、そのことが言えるんじゃないかと。

それから親になるところで線がクルリと一回転するところを「コペルニクスの転回」というふうに言ってきたわけですけど、このコペルニクスの転回というのは、ちょうどそのページの（3）の「人生のコペルニクスの転回」の二段目のところ、「わたしの妻は最初の子どもが誕生して新米ママの生活が始まって間もないころに、これはわたしの人生におけるコペルニクスの転回だわ」とため息混じりに語ったことがあった。それは新米パパが頼りないことに失望も含んだ妻の実感だったに違いない。しかし新米パパとなったわたしにも、程度の差や重みの違いこそあれ、このコペルニクスの転回という実感はあった。このころのわたしの体験が、妻のコペルニクスの転回という言葉と合わさって、ここで線分をクルリと一回転させることになったのである」とあります。こういうふうにして、コペルニクスの転回について少し解説を加えていこうとしています。

それからその前の図の、子ども、親、親の親と、この三世代を楕円でくくったその4については、「育てる－育てられる」関係の世代間循環というかたちで、従来の議論をなぞる解説をしています。問題はその次なんです。

6. 関係発達論の概念図の修正とその解説

その次のページの6.「関係発達論の概念図の修正とその解説」の（1）ですね。「広義の＜育てる者＞たちの影響という視点」というところ。ここからがちょっと、これまでのわたしの考え方の修正を図っているところなんですけどね。変更点の2つ目は、「子どもの

世代、親の世代、親の親の世代の三世代を取り囲む楕円の外側を、もうひとつの楕円、広義の育てるものたち、つまり兄弟、保育者、教師、近隣の人や親類縁者たちが取り囲んでいるところである。従来の図は育てる育てられる世代間の関係を強調することに主眼があった。それによって、命の世代間連鎖、死の世代間連鎖が見え、ひとりの人間の生涯関係のあらましが、人生のコペルニクスの転回と共に見えてきた。しかし、ひとりの子どもが育てられて育つ過程により密着して考えるとき、この生涯発達過程の実相をとらえるためには、三世代の世代間関係を取り上げるだけでは明らかに不十分である」というところにあります。

まず1つ目。「親子の関係は基本的に三者関係である」。これまでのわたしの関係発達論の中で、親子という表現をしてきてしまっていました。それは、自分というもの、私というものをベースにするから、どうしても親と子という表現になってしまったんだけど、子どもを中心に「育てられて育つ」というテーマに置き直おせば、親というのはいつも二人いるわけですね。実際に別居していても、子どもにとってみれば、親は二人。だから子どもと親の関係というのは、本来、三者関係なんです。これは『関係発達の構築』の後ろの方でちょっとだけ触れていることですが。その点でいえば、親の親というのは4人の祖父母であるわけですね。つまり従来の図で、一本の線分で表現されている親は.....こういうふうここにきてクルリと一回転して軌道を進んでいくというふうに書いてありますけれども、現実には親は二人いる。だからその始点がわずかに違うその二本の線が「親」という表現に圧縮されている。だから<親の親>も本当は四重線になって進行していつていものが、圧縮して<親の親>というふうにして一本の線で表現されているに過ぎない。だから親子の関係というのは二者関係が中心なのではなくて、むしろ基本的には子ども、母親、父親という三者の関係が中心になるのでなければいけない。たとえ離婚や死別によって単身家庭になったとしても、子どもから見れば、親と子の関係は常に両親との関係であると。このことは「育てられて育つ」過程に、両親の関係のありようが深く影を落とすことを意味します。例えばコペルニクスの転回ひとつを取り上げてみても、それが二人の親において同時になされるということはないわけですね。わが家においても、妻が早くコペルニクスの転回を成し遂げ、わたしが遅れた。この時間的に遅れたということが、わたしと妻の間の大きな摩擦になったわけですね（笑）。「なんでわたしひとり頑張らなあかんの？」という話になるわけで、「いや、わたしだって頑張っているよ」という話がなかなか通じないわけですね（笑）。そこに問題があって、でもそのコペルニクスの転回のところで時間差が起きてしまう。だから夫婦の間にいろいろな摩擦が起こる。でもその中で子どもは育っていく。そう考えなくてははいけないでしょう。それを親はコペルニクスの転回を遂げ、というふう一本の線で表現してしまうから、その三者の関係の困難、難しさとい

うものが見えてこない。その軌轢がだんだん沈静化していくなかで、つまり、子どもが生まれた後、だんだんそれぞれが親になっていく様子をお互いに受け止め合うなかで、夫婦の関係がもういっぺん安定してくる。その中で子どもが育てられていくという、そういう歴史を辿っていくんだということが、よりよく見えるようになると思います。「一般的には母親のほうが早く、父親が一步遅れるというように、多くの場合そこに時間差が生まれる。お互いにパートナーのコペルニクスの軌回をゆっくり待つことができればともかく、いち早く軌回を遂げることに向かったほうが遅れるパートナーに不満をいだき、それが夫婦間の軌轢になる場合がしばしばあるだろう」。こういう話をきちんとしておきましょう。そうすると子どもの誕生を期に、夫婦の間がおかしくなって離婚につながるというような現実の事例が、ちゃんと説明できるようになるだろうと思います。単に親が親になるところが難しいんだという言い方ではなくて、その二人の親のコペルニクスの軌回到時間差が生まれるということが、現実の子育てにどれぐらいの困難を引き起こすか、それを考えていくのが関係発達論の立場だろうということですね。そう考えれば、「子どもの育てられて育つ過程というのは、両親の間の関係のありように翻弄される危うい綱渡りのような過程であることが見えてくるだろう。親と子の関係は幸せな局面を多数含みつつも、その背後に常に葛藤を抱えた関係なのだ」ということが分かります。この今の最後の3行は、これまですでに言ってきたことでありますけども、それをよりはっきりと見えるものにするためには、これまでの図に少し補足的な説明を加えておく必要がありました。

同じ主旨で、「兄弟関係を考える必要がある」ということにもなります。多くの子どもには兄弟がいます。兄弟関係は、言うまでもなく、当の子どもの生涯発達過程に大きな影響を及ぼします。ところが兄弟の問題が、これまでの関係発達論の中に入っていない。兄弟として育てられていく中で、二人の間にどういうことが起こるのかという視点がなかったということですね。これをかなり意識して取り上げるようになったのは、やはり「障害の子どもを持つ兄弟の会」にわたしが何度か顔を出す機会があったからだと思います。兄弟に障害の人がいて、自分は健常であつたけれども、親は全部障害の子どもの方に気持ちを向けてしまって、自分は健常なんだからしっかりしなさいと言われて大きくなって大変辛かった。そういう思いをしている兄弟たちが、会を作っているわけですね。その会の人たちがわたしたちだって本当は支援がほしかったんだというようなことを言う。本当にそうだと思うんですね。ですから、そういうことを視野に入れたときに、ひとりの子どもの成長にとって、兄弟関係はとても大事な意味を持つんじゃないかと思います。ということは、この概念図の中に、本当はちょっとだけ時間が遅れてもう一個の新しい命が生まれて、それがまた同時進行していくと。親と子の関係も大切ですが、子どもと子どもの関係も大切で、お互いに影響を及ぼしあつて互いに成長を遂げていきます。それが家族というもの

です。簡単に言えば、家族発達心理学的な視点が、だんだんわたしの中に今強くなりつつあるということですね。関係発達論的な観点を家族関係発達論的に読んでいく必要があるなあということが、これまでの議論だといっていいかなと思います。

それからもうひとつが、「広義の育てるものの存在を考える必要がある」ということです。早期から日中の大半を保育の場で過ごす子どもたちがいっぱいいて、わたしも現在保育所を巡回するなかで、赤ちゃんの保育される姿を見ているわけですね。本当に0歳、早ければ4ヵ月ぐらいから保育園にやってきました。そしてその中で子どもたちは保育を受ける。そういう子どもたちを目の当たりにするときに、さっきの親子関係だけをベースにした「育てられて育つ」という議論は視点がちょっと狭い。子どもを育てる人たちというのは親だけじゃない。保育者もいる、大きくなれば先生もいる。で、それをやはり組み込んでいかなければなあというふうに思うようになりました。で、先ほど示した楕円の外側に、もうひとつ楕円を書いて、そして「広い意味の育てる者」を位置付ける。そうするとかなり大きく視野が広がって、子どもは育てられて育つというテーマが、より大きくわたしの視野に入ってきました。これまでは自分と子どもという、親子の関係をベースに問題を考えてきたんだけど、「育てられて育つ」というところに視点を置き直せば、そういうことが言えるんじゃないかと。

7. 4人の保育者の描いたエピソードから

そこで今、わたしは保育の皆さんにエピソードを書いてもらおうと思って、いろいろやってきているわけですが。その保育士さんが書いたエピソードを読むにつけ、本当にすごいな、この人たちは本当に子どもたちの生きている現場に、まさに身を挺して子どもたちとつき合っているなあと思います。保育の場から描きだされてくるエピソードは、本当に半端じゃない。学者が書くエピソードというのは、そういう意味では本当に底が浅い。軽い。そういう感じがするんですね。しかしそれを言い換えれば、ひとりの子どもは本当に一生懸命生きている。いろんな環境がある。恵まれた環境もあれば、厳しい環境もあるけれども、その中で子どもは本当に一生懸命生きているなあ、本当に健気だなあという感じがするんですよね。で、そこを保育者が描いたものを読んでも、「とても優しいお母さんと、とてもかわいらしい子どもがこんなふうにかかわり合いながら成長していきます」というふうに、わたしが描いてきたエピソードというのはある意味できれすぎる。きれすぎて、人が育つということの上澄みをすくい取ったかもしれないけれども、底の澱の部分まですくい取ってない。いろんなものが、ドロドロしたものが溜まっている、その澱までわたしはすくい取らなくてはいけないと思っているわけですが。その一端を、エピソードを通して紹介していこうと思います。つまり、完璧にはそうになってない

んですけども、『教育と医学』の連載では、例えば8月号が理屈っぽく進めば、9月号には保育のエピソードを入れよう。10月号ではまた理屈をこねるんですけども、11月号では保育のエピソードを入れようというふうにして、子どもの生きた現実ができるだけ読者に伝わるように仕掛けながら、このシリーズを書いていってみようと思っています。そこで、そのエピソードをちょっと紹介したいんですけども。

エピソード2

「弟をたたく M ちゃん」(エピソード1)は、東大出版会の「エピソード記述入門」にも収録したことのあるエピソードなので、時間がないから割愛して、次のエピソード2「新しい家族の誕生」というのをちょっと見てみますね。

「Nちゃんは5歳の女兒である。日ごろからおしゃべりが好きで友達とも元気に遊んでいる。母一人、子一人の母子家庭で兄弟がいないせいか、年長さんになってからよく園で赤ちゃんを抱っこしてくれたり、かわいがったりしてくれている。そのかわいがり方に一方的なところも見られ、またときおりちょっと寂しそうな表情を見せたり暗い表情になったりしているときもあって、わたしはNちゃんのそんな様子がずっと気になっていた。

午前中の戸外の遊びのときである。わたしが花壇の雑草取りをしているとNちゃんがやってきて、「先生、うれしいことがあったんだよ。お母さんにもほかの先生にも内緒だよ」って言う。そこでわたしが「どうしたの?」と、わくわくした気持ちで尋ねると、「お母さんのおなかに赤ちゃんがいるんだよ」と満面の笑顔と弾んだ声で答える。わたしはNちゃんのところが母子家庭であることが分かっていたので、Nちゃんの言葉に一瞬ドキとしたが、Nちゃんの笑顔に思わず「良かったね、おめでとう。Nちゃんお姉ちゃんになるんだね」と言ってしまった。言い終わる間もなくNちゃんは、「お父さん、ユウジっていうんだよ。ユウちゃんって言うてもいいんだって。先生もユウちゃんって呼んでいいよ」と言う。これまで二人暮らしだったNちゃんに新しい家族が誕生したことで会話が盛り上がった。今まで見せていた暗い表情とは打って変わって、これからの生活に希望を抱き、心躍る様子が手にとるように伝わってきた。わたしはお父さんのことには触れずに、「赤ちゃんたのしみだね。元気な赤ちゃんが生まれますようにって神様に祈っておくね。すてきなうれしい内緒話ありがとう」と伝えて、二人で一緒に保育室に戻った。後でほかの先生方にNちゃんの話の伝えると、Nちゃんはほかの先生にもすでに話していたようで、こんなことからNちゃんの計り知れない喜びが伝わってくるようだった。」

「考察。Nちゃんの喜びに接することで、これまでNちゃんが母子家庭という環境で味わってきた寂しい気持ち、両親の揃った家庭を見る気持ちがかえって分かるような気がし、胸の痛む思いにかられた。内緒話だよというNちゃんの心躍る思いにただただ共感してい

たわたしだったが、少し冷静になってみると、これから母親の出産、結婚、子育て、4人での暮らしと、Nちゃんの暮らしが大きく変わり、この先いろいろと大変なことがあるだろうなと思わずにはいられなかった。それでも今の喜びと一緒に喜んでくれる人をNちゃんが求めているのだと思い直し、このNちゃんの喜びの瞬間を理屈抜きで一緒に喜ぼうと。」

例えば、子どもと保育者とのやり取りが保育者によってこういうふうを描きだされる。で、これは、わたしが観察に入ってわたしが見聞きしたところでつかまえてきた母と子の関係というものははるかに踏み越えています。いろんな複雑な家庭事情を抱えているNちゃん。そこで自分がお姉ちゃんになる。でも、この保育士さんがドキっとしたと言うように、これから新しいお父さんが来て、そしてその新しいお父さんとの間の子どもが生まれてきて、そのなかでNちゃんがどうなっていくのかですね。世の中にはこういう家族の構図の中で、Nちゃんの立場の子どもが虐待の憂き目を見るというパターンをわたしたちはすでにいっぱい知っているわけですね。そのことが保育士さんの頭によぎるからドキっとしたり、素直に喜べなかったりするところがある。けれども今、Nちゃんの喜びを見るにつけ、やっぱり両親の揃った家庭にあこがれていたのだということも分かる。でも、皆さんも思われるように、このNちゃんのはしゃぎようというのは、Nちゃんなりに、これから起こる大変さを予感した過剰な興奮ぶりであるようにも思えますよね。ですからひとりの子どもの「育てられて育つ」ということの現実には、こういう局面があるんだということです。その前の弟を叩くというエピソードは、もうちょっとほんわかとしたエピソードなんですけれども、それと並べることで、これまでの関係発達論の中でなかった兄弟との関係とか、育てる者が必ず実の親であるという視点を超えて、もっといろいろと視野を広げて見たところで、「子どもは育てられて育っていく」という実相に迫ることができるんじゃないかということですね。

エピソード3

で、次。これはこの間わたしが京都で出会ったエピソードです。少しデフォルメしてありますけれども、「こんな保育園出てったわ」というエピソードです。

「もうじき6歳の年長児Sくん。3歳下の弟がいる。とても複雑な家庭事情を抱えているせいか、クラスの中で乱暴が目立ち、担任として困ることが多い。弟にも噛みつき等の乱暴が目立つ。母親は薬物依存からくる精神障害があって、今も病院に通っている。気分の浮き沈みが激しく、Sくんにもしょっちゅう手をあげているらしい。あるときお迎えの折りに<こいつのせいであたしの頭はおかしくなった>と言って、わたしの目の前で叩くこともあった。Sくんの実父とは3年前から別居し、父親が家を出ていった。1年前に新し

い父親ができたが、この人も最近家を出たので、それ以来、母親の精神的不安定は一層ひどくなっている。母親は就寝が遅く朝も遅いので、兄弟の登園が昼近くになることもしばしばである。わたしの園は異年齢保育をしている。

エピソード。朝の集まりのとき、Sくんの隣に座った4歳児のKくんがアニメのキャラクターの付いたワッペンを手に持っているのに気付く、＜見せろ＞と声を掛けると、強引に取り上げようとした。Kくんが体をよじって取られまいとすると、SくんはKくんの頭をパシッと叩き、立ち上がってKくんのおなかを蹴り上げた。大声で泣きだすKくん。あまりの仕打ちにわたしはSくんの思いを受け止めるよりも先に、＜どうしてそうするの？ そんな暴力許せへん！＞と怒鳴ってしまった。くるっと振り返ったわたしを見たSくんの目が怒りに燃えている。＜しまった＞と思ったときにはすでに遅く、Sくんは＜こんな保育園出てったる！＞と肩をいからせて、泣きべそをかき部屋を出ていこうとした。わたしは出ていこうとするSくんを必死で抱きとめて、＜出ていったらあかん、Sくんはこのクラスの大事な子だよ＞と伝えた。泣き叫びわたしの腕のなかで暴れながらも、抱きしめているうちに少し落ち着き、恨めしそうな顔を向けて、＜先生のいいひんときに、おれ死んだるしな＞と言った。わたしとSくんのやり取りをほかの子どもたちが不安そうに見ていたので、＜みんな朝の会にごめんな。今先生大事な話したいねん＞と子どもたちに声をかけた。そしてSくんを抱きとめたまま、子どもたちに、＜みんなSくんのこと、どう思った＞と聞いてみた。子どもたちは、＜Sくん、Kちゃん叩いたのはやっぱりあかんと思う。せやけど、Sくんは優しいところもいっぱいある。大事な同級の友達や。朝も一緒に遊んでてめちゃ面白かったしな。またSくんと遊びたい。出ていったらあかん、ここにいて＞と口々にいう。わたしの心配とは裏腹に、子どもたちはSくんを大事に思う気持ちを次々に伝えてくれた。わたしは涙が出るほどうれしかったが、ふと気が付くと、Sくんがわたしの体にしがみつくようにしている。そこで子どもたちにお礼を言って、＜Sくんは先生に話あるみたいやし、きょうは朝の会は終わりにしてみんな先に遊んでてくれる？＞と声を掛けた。子どもたちが園庭に出て室内で二人きりになると、Sくんは＜あんな、うちでしばかれてばかりなんや。うち出て行って反省してこいっていつもいわはる。出て行って泣いたら怒られるし、静かに反省したら家に入れてくれはるんや＞と話だした。わたしは＜そうやったんか、Sくんしんどい思いしてたんやな＞と言ってSくんを抱きしめた。＜先生はSくんのこと大好きや。先生が嫌いなこと知ってるか＞と言うと、＜人を叩いたり、蹴ったり悪いことすることやろ＞とSくん。＜遊びにいく＞と立ち上がると、＜Kちゃんにごめん言ってくるわ＞と言って走って園庭に向かった。

考察。Sくんは難しい家庭事情にあることは十分把握していたはずなのに、あまりにもひどい暴力だったのでカッとなってみんなの前で不用意に叱ってしまった。集団でSくん

を責める結果になり、＜出てったるわ、死んだるわ＞と言わせてしまったのは担任としてのわたしの大きな反省点である。けれども周りの子どもたちの優しさに助けられ、クラスの大切な一員であることをSくんに伝えることができてホッとした。二人きりになったときのSくんの話は、本当に胸の詰まる思いがして、＜しんどい思いしてたんやなあ＞としか言えなかった。Sくんは厳しい家庭環境の下で健気にも一生懸命生きていることがひしひしと伝わってきた。そういうSくんが少しでも落ち着いて家に帰れるよう、保育園ではSくんの辛い思いをていねいに受け止めて、Sくんがみんなと同じ大切な存在であることを伝えつづけていきたいと思った。」

8. おわりに

今わたしは、保育士さんたちの研修に駆りだされては、保育士さんたちの描くエピソードをもうすでに1000例ぐらい読むことに付き合ってきています。その中には本当にすごい、これよりももっとひどいエピソードもあります。でもこのような現実の中で、今、日本の子どもたちは育っている。育てられて育っていつているんですよね。やっぱり発達という学問は、そこまでちゃんと視野に入れてそこまで取り上げられる学問でありたい。これが今のわたしの率直な気持ちです。「心の理論」がどうしたこうした、いろんな議論がありますね。障害のことを巡ってはいろんな支援の理論もありますけども。わたしから見れば、みんな、何か子どもの生きている現実には迫れていない。理屈ばかりが先行して子どもの生きている現実から発想されていないように思えて仕方ありません。わたし、京都大学を定年になって気楽になりました。何を言っても怖くないという気持ちがあるもんですから、歯に衣着せぬかたちで言いたい放題言ってますけどね。それにしても、「育てられて育つ」という子どもの現実にもういっぺん立ち返ってみると、いろいろ見えてくるものがあって、そこに迫っていくのがわたしの関係発達論の現在ではないかと、こんなふうに思っているところです。

以上で終わります。

講演に対する質疑

森岡 どうもありがとうございました。最近の先生のご健在ぶりを私一年半ぶりにお目に

かかってうれしかったです。最初のこのフリップの3行の保育所指針の部分というのは、どう受け止められるんでしょうかね。保育所の皆さんには。主体として受け止められる、主体としてかかわっていくって、大変深い、重いことをおっしゃってるような感じがあります……主体という言葉が……いくつも……3つも挙がっていますが。3行に3つというのはかなり重い。主体という言葉は先生捨てられないんですよね？

鯨岡 はい。

森岡 この言葉はずっと昔から使われている気もするんですけども。これが改めて、社会的・政治的な意味を持ってきていると。それは今の現状でどうなんでしょうかね。これだけ講演をなさっているということなので。

鯨岡 その提言の中身というのは、結局「主体」という言葉をいかに砕いて伝えるかということに終始しています。じゃあわたしは主体という言葉はどういうふうに理解しているか？ その「主体」という言葉をわたしなりに整理し直したのが定年の年の『ひとがひとをわかるということ』という本の中身だったんですけども。これまでは「主体」というときに、自分の立場を積極的に前に押しだしていくという意味あいでの言葉は理解されてきました。しかしそれは「主体」という概念の半分に過ぎないということを言いたいのです。その半분을わたしは「私は私」という表現まとめています。つまり、人は「私は私」というふうに自己主張したり、自己発揮したり、自己表現したりしていきます。しかしこれは「主体」の半分に過ぎません。それだけでは足りないというか、それは「主体」の半分でしかありません。人間は周りの人との関係の中で生きていく存在ですから、「私は私」という立場を押し出すだけが「主体」であるはずがありません。つまり、「私は私たち」ともいえるような、「主体」のあり様があって、その両方がある初めて「主体」である。ところがこの両面はわたしの内部ではなかなか両立困難なものです。そこで「私は私」と「私は私たち」という主体の両面をヤジロベイでつないで、それ全体が「主体」であると考えています。

これをその提言の中でもかなり詳しく解説しています。その上で、こういう一個の「主体」という理解に立って、子どもを一個の「主体」として受け止めてください、そしてそういう一個の「主体」として育っていくように保育してください、これが、保育の役割ですと、まあ、こういう言い方をこれまでしてきました。だから確かに、森岡先生が言われたように、「主体」という言葉がキーです。だから本当の意味の主体的な自己主張（＜私は私＞の立場の主張）というのは、他者を傷付けない配慮を含んだ（＜私は私たち＞の立場

を踏まえた）自己主張であるというのが、私の主体概念の特徴です。だからモンスター・ペアレントのような自己主張の仕方というのは、「主体」壊れた姿だというのが、今のわたしの言い方です。つまり、わたしを尊重してほしいと思う人は、自分以外の人を尊重することも知らなければならない。それが「主体」の生き方だ。その両面ですね。その意味で、「主体」というのは常に両義的に考えられなければなりません。そこがキーになっているんですが、そこをいま保育の世界の人たちに、何とか分かってもらおうと思って、悪戦苦闘しているところなんです。これがなかなかなんです。指針にも私の提言が取り込まれて「主体」という言葉そのものは取り込まれてきました。しかしこの「主体」が両義性をはらんだ「主体」なのだという理解が不十分なので、従来通りとあまり変わらないような指針になってしまっているんですけれども。しかし、そこを何とかしていきたいなと思っているところです。

司会 ほかの方、いかがでしょうか？ じゃあ私が聞きたいことをよろしいですか。

鯨岡 はい。

司会 今日初めて聞いたことで「家族発達論」という話をしておられました。以前鯨岡先生が.....おっしゃったことをきっちり覚えているわけじゃないんですけど、「いわゆる急進的なフェミニズムといいますか、個体同士、男性も女性も一人としてやっていく、そういう世界もありだ」という議論に対して、「それは意見としては勇ましいけれども、人が生きていくということはそれだけで済む話ではないんじゃないか」という話を以前に言われていたような覚えがあるんです。それにつながる家族発達論というお話を言われたので、家族という枠組みが以前よりも強くなってきたように思うんですけれども。それに関連してというか.....今日ご参加されている方は全員のお名前をちょうだいしているのですが、9割が女性なんです、今日参加申し込みをされた方が。で、関係発達論というテーマで今回企画をしたんですけれども、それに応募された方が9割女性というのは、何かその家族とか関係ということを考えるうえで、ある意味ではそれに対しては女性のほうがシビアというか、考えるところ、思うところがあるのかなあということを考えました。これをどう鯨岡先生に答えてもらおうかというのは、ちょっと難しいところなんですけれども。そこら辺が、まったく無関係ではないのではないかなと。9割ですから、統計検定にかけたら有意差がでるのではないのでしょうか（笑）。今日は家族ということが前面に出ているお話を聞きながら、そういうことを思いました。ちょっとまとまりがないんですけれども。

鯨岡 あ、家族ということを前面に押し出したつもりはまったくないんです。ただわたしたちが、こうして命あって今こうしておるということに、家族ということは無縁であり得ない。わたしは家族のないところで生まれてきたわけではないと思っているので、だから自分の出生というものを探っていけば、必ずわたしの家族というところにいきつくし、そしてわたしの子どもたちが、わたしの元を離れて独立していったときも、結局はパートナーと生活を始めて、またそこに新しい命が生まれて家族が生まれてというんですかね。「そういう生き方はしません」という宣言をする人はもちろんあっていいと思うんだけど、人の一生涯というのを時間軸に沿って眺めていくときに、それはなかなか外せない視点ではないかなと。だから「家族を作るために生きるんだ」とかね、「家族なしでは生きちゃいけないんだ」とかそういう言説は、明らかにおかしいと思いますけれども。人がこうして命をつないでいくという現実。そして恐らく死を迎えるときも、一人で死を迎えるという人はいないだろう、必ずそれを看取る人がいるだろう、それが狭い肉親という意味での家族であるかどうかというのは別として、必ずその自分の近しい人たちが、その人を見送るだろうと思うんですね。そういうことを考えたときに、家族ということを前面に出すということよりも、個体に切り分けてしまうことに関して、むしろ抵抗しているというふうに考えていただいた方がいいんじゃないかなと思いますね。そしてきょう集まってこられた方の9割が女性だということについては、わたしには何の責任もありません（笑）。

質問者 先生のお話の中で、保育士さんのエピソードは研究者のエピソードに比べて、子どもの現実の危機をとらえていて底が深いというお話があったのですが、わたし自身、学生の幼稚園実習・保育園実習の実習簿、子どもの活動記録を読んだりとか、保育士さんの研修のためのエピソードを読ませていただいたときに、実感として「生き生きと捉えているな」とか「何も捉えてないな」というふうに感じることもあるんです。先生の資料のエピソードは評価優ぐらいの、わたしとしてはすごく生き生きと捉えているなと思ったんですが、底が深いとか浅いとか、生き生き捉えてるとか捉えてないというのは、先生がどういったところに着眼されて、どういった視点で感じ取られているのかということをお教えいただければと思います。

鯨岡 これはたぶん、エピソード記述という問題に深くかかわってくることなんですよ。東京大学出版会の「エピソード記述入門」を読まれて、いろんな人がそこを注目してくださったんですけども。あの本のなかで、これまでは「どう書くか」ということを中心に議論をされてきたけども、ある意味で、「どう周りの人が読むか」という問題が、エピソード記述にはあるんだ、と。つまり「読者の了解可能性に訴える」という表現をわたしはし

ていますけれども、だから、わたしがひとりの読み手として、そこにどれだけの深みのあるものを感じられるかがポイントです。だから、ある人が読めば「こんなものどこにでも転がっているようなエピソードやないか」ということになるかもしれません。その人の読みの浅さの中でいえばね。だからきょうご紹介したエピソードだって、「こんなものは保育士さんだったら誰でも書くよ」という人はいると思いますね。けれども「わたしの読み」、わたしがひとりの読者として読んで、そこで取り上げられていることの中に、どれぐらいの深さをわたし自身が考えられるか、というのがたぶん問題だと思うんです。だから、それこそ従来の枠組みでいえば、書き出されたエピソードがどれぐらい深いか、読み手と切り離して、エピソード記述そのものがどれぐらい深いかという議論をこれまでしてきたと思うんですよ。でもわたしは、そのエピソード記述を、書き手と読み手のある意味での相互行為として考えていこうとしています。で、その中で読み手であるわたしが、それこそ本当にジーンとくるような中身であれば、これはよいエピソードである。逆に、細々と書かれていて、ほかの人が読めば「これはいいなあ」というものでも、わたしが読んでわたしが何もそこで深みを感じなければ、たぶん深いエピソードとは言わない。これはかなり読み手というものに掛かってくることです。だから深いというのは、あくまでわたしの言説として受け止めてほしい。つまり「エピソードそのものが深い」というふうに言ってしまうと、非常に怪しい議論になっていってしまう。これまで通りの議論になってしまって。もちろんエピソードをどう書くかという問題もあるし、描きだされているものが浅い深いというものは、本当はあると思うんですけどね。でもそれ以上に、短くて4行か5行ぐらいのエピソードでも、本当に打たれるエピソードというのはあるんですよ。だからやっぱりそれは、いいエピソードだろうというふうに思っていてね。浅い深いに関しては、平均をとれば全員が深いほうに丸をしたとか、そういう話には必ずしもならないんじゃないか。ひとりの読み手としてそれが深い。そしてそういう「深いね」という評価を共有する人がたくさんいたら、それは誰が見ても深いんだろうな、と。でも今のわたしのスタンスとしては、「誰が見ても深い」というところはあまり議論しようと思ってなくて、まずはこのわたしがどう感じるか、どう読めるかということをベースに考えようとしています。いいでしょうか？

かなりあやうい話をしていますよ、今のは。たぶん物議をかもす（笑）。

司会 先生、私、加えてひとつお聞きしたいんですけど。そうすると読み手のエピソード記述ということもありえるんですかね？ なぜそういうふうに読めたのか、わたしがそう感じたのか。その体験を提示することによって、書いた人に応答するという、そういうやり取りもあり得るということですね？

鯨岡 エピソード記述へのコメントをして、そのコメントへのメタ・コメントというのは十分あり得ることですね。今日のエピソードは資料としてポーンと提出しただけで、わたしがどう読んだかということは述べていませんから、「これが深いということはいったいどういうことなんだろう？」と言われるんですね（笑）。当然、これをなぜわたしが取り上げたのか、なぜこれがいいと思ったかというのは、当然わたしはこの雑誌のなかでは若干のコメントをしています。たぶん雑誌の中では 10 行ぐらいでコメントするんですが、雑誌というスペースの制約の中でできるコメントはこれぐらいだけでも、本当はいろいろコメントをしだせば山とコメントしたいことがある。そうするとコメントへのメタ・コメントというのは当然でてくるわけですね。